視能訓練士学科（昼間３年制）

養成目的

昭和 46 年に視能訓練士法が制定されて以来、視能訓練士は主に小児の斜視・弱視の検査・訓練・治療を中心に、大学病院や国公立病院・総合病院において活躍してきた。高齢化社会の現代、眼科における受診者の数は増加傾向にあり、またパソコンやゲームなどの使用により、現代人ならではの眼の病気も増えてきており、業務内容は斜視・弱視の検査訓練に加え、一般眼科検査にまで広がった。さらには中途視覚障がい者リハビリテーション領域まで拡大してきている。医療の高度化と高齢化社会の今日、医療の目的が疾患の治療だけではなく、疾患を有する患者の QOL 向上へと変化してきている。また近年、検査機器はますます精度を増し、より速くより精密に検査できるようになってきた。よって視能訓練士には、高度な検査技術、疾患との関わりを考察推論する力、患者様との対話力も含めたトータル的なサポートとケアができることが求められている。

本学科では３年制養成課程の中で、実学教育・人間教育・国際教育の教育理念に基づき、視能訓練士として必要な基礎教養科目をはじめ、専門科目も基礎から段階的にステップアップできる充実したカリキュラムを組んでいる。 また、「職業実践専門課程」として業界と連携し、実践的かつより専門的な能力を育成し、医療の高度化と高齢化社会という多様化するこれからの社会に対応でき、卒業後も変革していく眼科医療の中で活躍していけるよう、常に研鑽し向上心をもった人間性豊かな視能訓練士を育てることを目的とする。

養成目標

学年	到達目標
1 年前期	知識：視器の解剖、名称、眼球の動きなどの基本的知識を身につける。また、身近な時事問題を通して「読む・書く」の基礎学力と学習習慣を身につける。 態度：新入生研修、面談、ホームルームなどを通じ、社会人としてのマナーや生活習慣、規律を身につける。 技能：視器の解剖生理病理実習を通して、眼圧、屈折検査など基礎的な他覚的検査ができる。
1 年後期	知識：基礎分野、専門基礎分野の学習を通して、毎回の授業で小テストを実施することにより、視能訓練士としての専門基礎の定着を目指す。 態度：臨地実習Ⅰの準備として、医療人としてのマナー、言葉遣い、患者とのコミュニケョン力を身につける。 技能：視覚生理学を通して、静的視野検査、裸眼視力測定など、基礎的な自覚的検査ができるようになる。
2 年前期	知識：専門分野を多く習得し、眼科疾患、生理光学などの知識を生かした再現性のある自覚的検査を習得する。 態度：キャリア教育を通して、社会的・職業的自立に向け、基盤となる能力や態度を育てる。 技能：臨床家による講義や実技指導、検影法実技マイスター教育を通し、視能訓練士としての特殊技術習得を目指す。

2 年後期	知識：医療事務を学ぶことにより、保険点数の計算や常にコスト意識をもって診療業務に取り組むことができる医療人としての姿勢を養い、「医科医療コンピュータ２級」を取得する。 態度：医療面接 OSCE を通して、臨床における視能訓練士の全体像を学ぶ。 技能：実習前実技試験、幼稚園・保育園実習などを通し、臨床で役立つ総合的な考察力、実践力を習得する。
3 年前期	知識：国家試験対策と臨地実習を通し、問診から検査、結果、診断へと結びつくような臨床で活かせる知識の習得を目指す。 態度：海外研修を通して、現地学生との交流を通し、グローバルな視点で視能訓練士の立場と役割を理解し、国際感覚を養う。 技能：発展していく医療技術や機器の知識を習得するため、産業界と協力し、時代に即した検査技術を習得する。
3 年後期	知識：基礎知識の総復習から、応用・発展、臨床問題に取り組み、全ての学生が国家試験合格を目指す。 態度：臨地実習で学んだ医療人としての接遇、態度を実践すべく、自ら考え行動する。 技能：卒業研究に取り組み、エビデンスに基づいた研究の意義、手法を身につけ、卒業後も研究できるための礎を築く。

取得目標資格

視能訓練士（国家資格）　（卒業時に受験資格取得）

医科医療コンピュータ２級（日本医療事務検定協会認定）

視覚障害者ガイドヘルパー（大阪府指定　同行援助従事者養成研修）

就職分野

大学病院、総合病院、一般病院、眼科専門病院、眼科医院

職　　種

視能訓練士